

高専生と富山ゆかりの作家小泉八雲の「貉」を読む

—再話・翻訳・創作—

久保陽子*

Reading Koizumi Yakumo's "Mujina" as Toyama's Local Literature
with Technical College Students: Re-telling, Translation, and Creative Writing

KUBO Yoko*

This paper reports on a practical example of a class designed to connect local literature study to education. In three class sessions, we read "Mujina" by Koizumi Yakumo, his collection of books is in Toyama. First, a comparison of "Mujina" with the originals reveals the uniqueness of his work, with its detailed descriptions of merchants' kindness. Second, students translated "Mujina" written in English, not verbatim, but including their own interpretations. Third, students created their own original stories based on "Mujina" in which a suspicious event is repeated twice. This multifaceted approach to Yakumo's "Mujina" led the students to a deeper interpretation of the originality of it, a reaffirmation of the differences between languages, and an independent creative activity.

キーワード：地域文学研究、小泉八雲、Mujina、貉、アダプテーション、再話、翻訳、創作

1. はじめに

「雪女」や「耳なし芳一」や「ろくろ首」などの怪談作者として知られている小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）の蔵書が、富山に移管されたのは1924年である。2024年の今年は100周年という節目の年である。この地域の有する文化財産と、それを利活用しつつ普及させようと様々な立場から研究や活動を行う人々によって、八雲作品もその蔵書も大切に受け継がれてきた。こうした地域文学研究と教育を繋げることができないかという関心が本授業の起点となっている。学生たちに地元の文学に愛着を持つてもらい、親しんでもらうこと、地域研究の一環として位置付けられよう。

2. 授業の概要

本授業は富山高等専門学校射水キャンパス国際

ビジネス学科 4 年生 37 名を対象とし、小泉八雲「貉」を取り上げ、原作との比較、翻訳、創作を通じて、物語における解釈と創造についての学習を行った。同科 4 年次前期に開講される「教養基礎」は、全 15 回を一般教養科の 4 人の教員がオムニバス形式で行うもので、そのうちの 3 回分を使った。シラバスの到達目標には、「メタ認識、つまり、世界の中の日本の位置、自分のおかれている立場などを考察できるようになること」とあり、「さまざまな形での「教養」を身につけること」が目指される¹。各教員の専門性を活かせる比較的自由度の高い科目である。

作品の選定にあたっては、3 回の授業で読める短いもの、英語の原文で読めるもの、作品を踏まえて創作活動を行えるシンプルな構造のもの、読んで面白く八雲作品への興味に繋がるものといったことを念頭に置いた。のっぺらぼうの名前でよく知られ、受講者にも馴染みがあると思われる八雲の代表作の 1 つである「貉」（むじな）を扱うこと

*一般教養科

した。

学科の特質や学生の関心に沿って、作品の精読よりも、文化、言語、時代を超えて物語が創造・再創造されるアダプテーションをキーワードとし、多角的に作品を読み進めることにした。受講者は英語に加え環日本海諸国語（韓国語・中国語・ロシア語）を15歳から学び、高い語学力と語学への関心を有している。「貉」を英語原文で読むことを授業の一部に取り入れ、作品を国際的な視野から捉える契機とした。国際性という意味では、ギリシャで生まれ、アメリカをはじめ世界各地へ移り住み、そこでの見聞をジャーナリストとして書き記し、また来日してからは、国際的で巨視的な視点から日本を捉え、西欧の読者に日本を紹介した八雲という作家は、自文化を外側の視点から見つめ直すきっかけとなる格好の教材ともいえる。

授業はプリントを配布した上で、パワーポイントを用いながら行った。授業評価は各回の課題の提出とし、毎時課題を出した。1回目は原作との比較、2回目は翻訳、3回目は物語の創作を課題とした。

3. 各回の授業活動

3.1 第1回授業

第1回目（5月31日）の授業では、作者と作品の基本情報と、富山と八雲の関係性について説明を行った。八雲は富山を訪れてはいないものの、その蔵書が現在富山大学附属図書館中央図書館にヘルン文庫として所蔵されている。これは八雲の死後、関東大震災が起こり、蔵書を安全な場所に移動させたいと考えていた折に、富山大学の前身である旧制富山高等学校の初代校長南日恒太郎が、弟田部隆次からその話を聞き、蔵書の招致に名乗りを挙げたことによる。田部は八雲が東京帝国大学で英語教師をしていた頃の教え子の一人である。こうした経緯を富山大学公式チャンネル「富山大学ヒストリア 08 小泉八雲とヘルン文庫」²を視聴し、適宜情報を口頭で補足した。八雲の名前を知ってはいても、富山にその蔵書があることを知ってい

る学生はほとんどいなかった。富山で育った学生が地元の文化を知る機会になるだけでなく、県外から来ている学生にもヘルン文庫の存在を知ってもらう機会となった。

次に作品の成立について、八雲は妻セツに日本に伝わる伝説、民話などを語らせ、そこに八雲が独自の解釈を加えて創作した「再話」であることを説明した。伝承が各地に様々なバリエーションをもつことを確認するため、受講者たちに「雪女」の話を紹介してもらった。雪道で迷っている人を道案内してくれる話、雪の中で迷った旅人を連れ去つて何人も山小屋の中にコレクションしている話、雪の中にいる美しい雪の精など受講者の記憶する「雪女」伝説はまちまちであり、伝承あるいは口承の特質を確認できた。各地に伝わる「雪女」伝説については、怖い話もあれば笑い話もあることを教員からもいくつか紹介した。

ここから授業の本題に入り、まず八雲の「貉」を平川祐弘訳で音読した。以下、あらすじである。ある晩、商人が紀伊国坂を歩いていると、若い女がかがんで泣いているのを見つけ声をかけた。女が振り向きその袖を落とすと顔に目鼻口がなかった。驚いた商人は蕎麦屋の屋台に駆け込み事情を説明しようとした。蕎麦屋の主人が自分の顔をつるりと撫でるとのっぺらぼうになり、それと同時に屋台の火も消えた。

初読の感想として、タイトルの「貉」に関して、これが妖怪なのか何かの生物なのかが気になったことや、タイトルからは気がつかなかつたが、読後に子供の頃に読んだ「のっぺらぼう」であるとわかり「懐かしさと、子供ながらの恐怖心を思い返した」というものがある。また昔話が教育的な意味を持つものが多いからか、この物語から「油断してはいけない」や「夜は出歩くな」といった教訓を読みとろうとする感想もあった。

また構成について「物語は短いけれど起承転結がしっかりと分かれしていて読みやすかった」や「蕎麦屋を見つけて安心したところから再度恐怖へと連れ込むので昔話らしさを感じた」など、女中に続い

て蕎麦屋ものっぺらぼうであるという奇怪なことが繰り返されるいわゆる「再度の怪」というわかりやすい構成やそれが昔話に多い構成であることに言及したものもある。最後の結末は予想できるものの「やっぱり屋台の人がのっぺらぼうだったことが分かって「はあ…」とため息が出そうだったし怖くな」ったとあり、物語構造を客観的にみる目を持ちながらも、物語世界に没入しながら読んでいることがわかる。短い物語ながらもまたある程度結末を予測できいても、恐怖心を搔き立てるのは、本作が「詳細に書かれており、場面や場所、雰囲気、登場人物の気持ちなどが簡単にイメージできた」ことにも拠るだろう。また「最後の屋台の火が消えた後が気になった」など、その後の商人（の安否）に想像を巡らせているものもいた。

そして特に注目したいのは、「この男性は優しい人なのに二度も怖いめにあったのがかわいそう」といった商人への同情心を書いた感想が散見されたことだ。怪談を読むという前提から怖い話が展開されることは予想されていようが、その上で善人なのに大変な目に二度もあう理不尽さや非情さに納得できないという思いを抱く受講者が一定数いた。であるから、「優しい人をためらいなくおどろかしたり、逃げた先に光を置きおびきよせて、すこしの希望をもたせるところが妖怪らしさ、人間にはない純粋な非情さが表れていておもしろいと思った」といった、貉の残酷性について言及した感想もある。

さらに「「商人が本当に親切心に富んでいた」ことに言及する意図が分からなかった」という率直な疑問が示すように、物語内に括弧で差し込まれた商人の「親切心」に関する説明的な文章をいささか唐突だと違和感を抱くものもいた。先取りして述べるならば、商人の人物像とりわけ内面が詳細に書かれているのが八雲の顕著な創作の部分であり、八雲版「貉」の特徴といえる。女中の姿を認めた商人は、女が濠に身投げしようとしていると察し「なにか助けてやれぬものか、なにか自分にできることで慰めてやれぬものか、と思って立ちどま」

り、「もしお助けできることがあるなら、喜んでお助けいたしましょう」と「心底からそのつもり」で声をかけ、「男はできるだけやさしい口調でまた声をかけ」ている。このような細かな内面の描写によって商人がことさら善人であることが強調されることで、のっぺらぼうという視覚的な恐怖だけでなく、道理が合わない不条理さによる恐怖も加わっている。悪いことをした人物や欲を出した人物がひどい目にあう教育的な昔話のイメージを念頭において読めばなおさら、その理不尽さに「貉」なるものへの畏怖が生じることとなる。

次に『百物語』の「貉」を音読し、比較をした。再話において何を原作とするのかを断定するのは難しいが、平川祐弘編『怪談・奇談』（講談社学術文庫、1990年）には、ヘルン文庫蔵本から翻刻した原拠と推定される原話が掲載され、「読者はハーンあるいは夫人を初めとする介在者が直接、拠った原文を読むことが出来る」³と説明されている。ただ介在者の存在から、原話との比較の際には「字面の一致や差異に捉われ過ぎてはいけないだろう」⁴と注意を促してもいる。

授業では比較表を用いて内容を整理した。表の項目は、時間、場所、状況設定（天気、場所の特徴など）、女の様子、蕎麦屋の様子、結末とした。板書で共有したのち、作品の異同について考察を書いてもらった。作品全体として八雲版ではより心情描写が増え、「会話を増やし、リアル感をもたせている」という指摘がいくつかあった。台詞が多くなったため臨場感が増し感情移入しやすい物語へと改変されている。部分的な異同としては女の描写と結末に言及しているものが多かった。百物語版は女の顔の長さが2尺（=約60センチ）とされるが、恐怖に慄いた商人は長さを2尺と「冷静に分析できないはずだから、その冷静感を消して、八雲版は「ただののっぺらぼうは怖いという恐ろしさを伝え」ているという考察がある。

結末については、男が氣を失って倒れたのちに通りがかりの人に助けてもらった百物語版に対し、屋台の火が消え唐突に物語が終わる八雲版の方が

「不気味さや恐ろしさを増長させる効果」や「読者に想像させる効果」があるという。また語りに着目し、老僕の若い頃の話である百物語版に対し、貉を最後に見かけた商人が30年前に亡くなっているとする八雲版は、「結末があいまいでその後男がどうなったのかが分からぬ」ととも相まって、より「怖さを感じさせる」という指摘もある。男の消息が曖昧なまま暗闇で閉じられる結末に、高校国語の定番教材「羅生門」を想起した受講者もいた。

また先述の商人の親切心とも重なるところであるが、持病の癪が起つた女を助けるのではなく、身投げしようとして泣いている女を助けることから「男がより優しく描写されるように」なっているという。さらに八雲版では商人の声かけに女は返答をしないが、「女が答えないことで緊張感を高めている」や「女の奇妙さがより増して、怖い感じが出ている」という指摘もある。それだけでなく、ここでは応答しない女に商人が何度も声をかけることで、心から心配し手助けしようとする商人の「親切心」も表出されている。

また情景に関して、雨や風の描写がなくなり、暗闇の静寂へと変わり「音も光もない」という不気味さが八雲版にはあるという。ひっそりとした闇の中で起る怪へと変更されているだけでなく、この変更は、「雨が降っている状態で泣いていても分からぬ」からであるという現実的な理由も指摘されている。大雨の中でぶつかったものに提灯の灯りを向けると女がいた百物語版に対し、商人が泣いている女の姿を認めて声をかけた八雲版の方が、より「親切心」が際立っているといえる。

このように受講者は、百物語版との比較によって、八雲版「貉」の独創性について理解を深めた。のっぺらぼうという表象と結末の異同は多くの受講生が着目するところであったが、初読時から受講者が抱いていた商人の「親切心」の強調が、比較によってより鮮明化された。

3.2 第2回授業

第2回目（6月14日）では、本授業の課題が八

雲の英語原作の翻訳であることを伝え、まず翻訳に関連してアダプテーションという概念について説明した。アダプテーションとは原作とは違う表現媒体へと作品を変えることで、マンガから演劇、小説から映画などへ再創造されたものである。表現媒体を越境するだけでなく、文化、時代を越えて、その文化／時代的背景に影響を受けながら作品は変容する。「貉」あるいは「のっぺらぼう」は、落語、講談、絵本、紙芝居など、様々なアダプテーション作品がある。加えて、町田宗七編「貉」『百物語』（1894）、八雲「Mujina」（1904）、平川祐弘訳「貉」（1990）は、幾重にも解釈と再創造行為が加わり、その都度物語は変容（アダプト）している。

リンダ・ハッチオンは『アダプテーションの理論』（晃洋書房、2012年）の中で、「アダプテーションは異なるメディアへの移し換えであるので、それは媒介し直すこと、すなわち具体的に言えば、ひとつの記号体系（たとえば言語）から別の記号体系（たとえば映像）へ間記号的に置き換えられる形態での翻訳に等しい」⁵とし、翻訳とアダプテーションの類似をみる。そして「逐語的な翻訳というものが存在しないように、逐語的なアダプテーションというのもありえない」⁶と述べている。

「逐語的」な翻訳が存在しないことを確認するため、鴻巣友季子の『翻訳教室はじめの一歩』（ちくま文庫、2021年）から、実際の翻訳例をいくつか紹介した。鴻巣は「翻訳」が学校の授業で行う「英文和訳」と異なることを、実際の翻訳例を示しながら具体的に説明している。これをクイズ形式にして、どのように「翻訳」するかを受講者に考えもらった。鴻巣は「だれかと言葉を交わすというのは、他者と「解釈」をやりとりすること」（＊太字は原文）とし、「これはまさに翻訳にもあてはまる」と述べているように⁷、言葉のやり取りやその行為の1つに含まれる翻訳は「解釈」のやり取りであるという考え方を共有した。

このように翻訳が単なる再現や複写ではなく、解釈を含めたコミュニケーション行為であること踏まえた上で、「Mujina」の「Up kii-no-kuni-zaka

he ran and ran;」から結末まで、「英文和訳」ではない「翻訳」に挑戦した。そのはじめの部分、目鼻口がない女を見た商人が、逃げ出す場面についてみていく。

原文

Up kii-no-kuni-zaka he ran and ran; and all was black and empty before him. On and on he ran, never daring to look back;

平川訳

紀井国坂を上の方へ、上の方へ無我夢中で逃げ出した。あたりは一面の真暗闇、前方は空無でなに一つ見えない。恐ろしさのあまりよう後ろを振向くこともできず男はひた走りに走った。

平川訳では、「ran and ran」は「無我夢中で逃げ出した」と訳され、「ran」は「走る」ではなく、女を見た直後の行動であるため「逃げ出した」と訳している。また「Black」を「真暗闇」、「empty」を「空無」とし、さらに「all」を「一面」や「なに一つ見えない」という言葉を使い、男の周辺が人気のない暗闇であることが強調されている。「勇気をもって～する」という意味である「dare」を「never」で否定し、男が振り返る勇気がなかったとされるが、そこに「恐ろしさのあまり」という解釈を付け加えてもいる。次に引用するのは2名の受講者の訳である。

受講者訳

彼は周り全てが暗闇と空虚で満たされた紀井の国坂を必死で登った（ママ）。今が何時でどこにいるかも分からぬまま走り続け、後ろを振り返ることすらしなかった。

受講者訳

男は必至に走った。真っ黒な闇の中、彼の前にはまるで彼以外に何もないようだった。彼は

延々と走り続けた。彼にはもう後ろに目をやる勇気は残っていなかった。

1つ目の訳では、原文とは語順を変え、駆け上っている紀井国坂そのものが「暗闇と空虚で満たされている」としている。さらに「今が何時でどこにいるかも分からぬまま走り続け」と解釈を付け加えている。怯えた男が懸命に走り続け、暗闇の中でどこを走っているのかもわからず、またどれだけ走っても灯りや人の姿を見る事ができない時間の長さを、ひいては男の恐怖と心細さを解釈として盛り込んでいる。

2つ目の訳では、「ran」を「走った」と訳し、「必死に」や「延々と」という言葉で一目散に走っている様子や走り続けた時間の長さを強調している。

「empty before him」は「彼の前にはまるで彼以外に何もない」とやや直訳気味に訳しているが、「彼以外」と加え、逃げ走る男の前方に何もなく、男が1人きりであることが伝わる。「look back」を「振り向く」や「振り返る」とせずに、「後ろに目をやる」としており、一目も見ることができない恐怖も伝わってくる。また「勇気は残っていなかった」とすることで恐怖に慄き、力を振り絞り命からがら逃げている逼迫した様子が訳出されている。

この後「and at last he saw a lantern,」と続き、男が蕎麦屋のちょうどいいの灯りを見つける場面になる。これを「その明りは彼にとっての唯一の光、希望であった」と解釈を付け加えた受講者もあり、暗闇の中無我夢中でひた走ってきた男にとって、蕎麦屋の灯りがいかに救いだったのか、翻ってその道中がいかに恐ろしく心細かったかということを盛り込んでいる。

執筆者が英語に関して十分な知識がないため、細かい文法等に深入りして授業をしたり論じたりすることができない限界はあるものの、英単語の直訳ではなく物語の文脈に照らし合わせて適切な語彙を選ぶ言葉選びの工夫や、文章の組み立て方（語順、文の長さ、文体）に注意を払うことで、日本語についてより深く考えるきっかけとなったの

ではないかと考える。また単なる言葉の変換作業ではなく、深く読み、解釈した上で、訳すという創造的な活動にもなった。正確さだけでなく大胆な意訳も含め、受講者は思い思いに工夫を凝らしながら楽しみながら訳を作っていたように受けとれた。単語の正確な訳出と、文脈に合わせた訳のバランスをいかに取るかは、翻訳のプロでも迷うところであると思うが、本授業では正確性よりも自由に訳す方に重点を置いたことで、受講者たちの創造的な活動を促した。ペアやクラス全体で課題の発表をした際には、他の受講者の発表を興味深く聞き、工夫を凝らした箇所などは感嘆の声も漏れていた。この活動を通じて結果的に受講者が作品を精読し、言語への認識を深める機会になっただけでなく、教員としては受講者の作品への理解や受け止め方を伺い知れたという発見があった。

3.3 第3回授業

第3回目（6月24日）の課題は現代版「貉」の創作である。創作に先立ち、作品の先行研究を紹介した。作品を多角的に捉え理解を深めるだけでなく、次年度に卒業研究を控えた学生たちに、専門的な論考に触れる機会とした。また課題の前に、アダプテーションの一例として落語「のっぺらぼう」⁸の鑑賞を予定していたが、時間の都合で口頭での内容説明となってしまった。のっぺらぼうを見た悪夢から覚めて妻に語ると妻がのっぺらぼうである、それがまた夢だったと延々に夢オチが繰り返される。このようにオチのある落語では笑い話になっていることを紹介し、自由な創作へと促した。とはいえる、創作に際してはある程度制約を設け、再度の怪のパターンを踏まえること、読んだ人が先行作品＝「貉」を想起できることの2つの条件を出した。

高校国語の授業では検定教科書の作品読解が中心となり、創作は時間的にも学生の技量的にも俳句や短歌といった短い作品に限られてしまいがちである。執筆者自身も物語の創作を授業で扱うのは初めてで予想が立たないところもあったが、受講者は熱心に課題に取り組んでいた。「貉」を踏ま

えることである程度物語の骨組みがあり、それを変容（アダプト）させて創作するという、0からの創作ではないことが物語創作の敷居を下げたと考える。

受講者が創作した物語では、多くの学生が身近な学校生活（授業、寮、学校行事）、登下校、アルバイト、家族などのシチュエーションを選び、主人公を自分か自分と近い年齢の人物に設定していくが、中にはサラリーマンが主人公であったり、場所を東京や外国に設定したりしているものもあった。目・鼻・口がないのっぺらぼうを登場させた物語が多くたが、異質な特徴をもつ別の何物かへと変えたものもいた。

ここでは紙幅の都合、1人の受講者が書いた物語のあらすじを紹介する。

テストの結果が悪かった帰り道、牛ヶ首用水にかかる橋を渡った。用水にテストを投げ捨てると、水の中から声が聞こえ、見てみるとそこには頭は牛で首から下は男という不思議な生物がいた。泣きながら家に帰ると両親は心配したが、思い出すのも怖くて口をつぐんでいた。晩御飯のすきやきの大きな鍋をのぞくと、さきほどの牛男がこちらを睨んでいた。牛男は捨てたはずのテストを残し湯気とともに消えていった。

この物語から「貉」を想起するかどうかは不明であるが、「貉」を踏まえた創作の工夫が随所に見られる。まず牛ヶ首用水は実際に富山県婦中市にある地名である。紀伊国坂の細かい描写から始まる八雲版「貉」を踏まえ、場所の描写から始まり、その場所が避けられている理由を貉が出るという理由から、用水の流れが急で危険だからとして、普段通らない場所として設定している。泣いているのは女ではなくテストの点が悪かった語り手「私」とし、百物語版で女につまづき提灯で照らすところを、投げ捨てたテストが男に当たりスマホのライトでその姿を確認している。二度目の怪は、家で出迎えた家族によって引き起こされると予想していたが、そうではなく、すきやきの鍋から再び不思議な生物を登場させ、ユニークな創作となっている。

最後は屋台の灯りが消えるのではなく男が湯気とともに消える。

この創作から紀伊国坂という実際にある地名が、この物語にリアリティを与えていることを理解した上で、身近な地名に置き換えていることがわかる。地名の本来の由来とは関係なく、名前のイメージから想像を膨らませて書いている。また「日もとっくに落ちていて」や「いつもなら通らない」と人を寄せ付けない場所であることと、日没後の暗い帰り道で、奇怪なことが起こりそうな場面を八雲版から引き継ぎながら創作している。テストの点数が悪かったことがきっかけとなり、悪夢のような物語が展開されていく学生らしい題材を取りながら、そこに「貉」の物語と、地元の地名のイメージを重ね合わせ、想像／創造することで、面白味のある不思議な物語へと変容、創造された。

受講者の中にはA4用紙の両面に渡る力作も見られ、授業内で書くには時間が足りなかった。ペアで課題を見せ合った後、全体で2名の学生に発表してもらった際には、物語を興味深く聞き、時折笑いも起きていた。この創作に関しては、物語の出来（そもそも何をもって芸術性を評価するのか）ではなく、受講者が「貉」から何を引き出しているのか、その換骨奪胎の仕方が興味深かった。加えて、この創作においても、受講者の「貉」との関わり方＝コミュニケーションを知ることができた。

4. まとめ

このように地域文学研究を授業に落とし込む一例として、学科の特色に合わせた国際性を意識し、比較、翻訳、創作という活動を通して、多角的に作品にアプローチした授業を行った。3回の授業を通して、課題も含めややボリュームが多かったことが反省点である。書くスピードが比較的速い文系学科の学生であるからこそ成立したものの、4回に分けて実施するなどの時間配分の改善が必要とされる。課題に関してはペアで見せ合ったりクラス全体で数名が発表したりという形となったが、翻

訳や創作に関しては、受講者が熱心に取り組んでくれただけに、より丁寧なフィードバックが必要だったと考える。

他方、良かった点としては、原作との比較や、翻訳や創作という創造活動を通じて、八雲作品の特質がより鮮明化され、より深い読解に結果的に繋がったことだ。翻訳や創作では、受講者の作品との関わり方＝解釈が示され、作品のどこに着目してそこから何を引き出すのか、文章をどのように受け取っているのか、ということが教員側から了解された。また高校国語ではなかなか扱うことのできなかった物語の創作を楽しみながら行うことができたことは授業者としての収穫であった。

本授業が、作品の理解や言語の認識をより深める契機となるだけでなく、郷土文学への理解や愛着へと繋がれば嬉しい。

*作品の本文の引用は以下に拠る。

- ・小泉八雲／平川祐弘編『怪談・奇談』（講談社学術文庫、1990年）
- ・Hearn, Lafcadio. *KWAIDAN*, Robinia Classics, 2023.

5. 謝辞

国際ビジネス学科4年生には、授業を行う上で、また報告書を執筆する上で、多くの喜びと気づきをもらった。文章の引用、紹介を快諾してくれたことを改めて感謝したい。

富山八雲会では、『怪談』の輪読などを通じて会員の方々に多くのことを教えていただいた。この場を借りて感謝申し上げる。

6. 注

- (1)2024年度富山高等専門学校国際ビジネス学科教養基礎シラバス syllabus.kosen-k.go.jp/Pages/PublicSyllabus?school_id=17&department_id=16&subject_id=0154&year=2021&lang=ja (最終閲覧日 2024年12月12日)

(2)富山大学公式チャンネル「富山大学ヒストリア

08 小泉八雲とヘルン文庫」

<https://www.youtube.com/watch?v=4lKWTkIG-RM>

(最終閲覧日 2024年12月12日)

(3)小泉八雲／平川祐弘編『怪談・奇談』(講談社学

術文庫、1990年) pp. 331-332

(4)前掲。p. 329

(5)リンダ・ハッチオン／片渕悦久・鴨川啓信・武田

雅史訳『アダプテーションの理論』(晃洋書房、2012

年) pp. 20-21

(6)前掲。p. 20

(7)鴻巣友季子『翻訳教室はじめの一歩』(ちくま文

庫、2021年) p. 58

(8)柳家一琴の貢「落語『のっぺらぼう』 柳家一琴」

<https://www.youtube.com/watch?v=KA0mLM5KKuM>

(最終閲覧日 2024年12月12日)